

# 壮大な「海賊史観」

稲賀 繁美著

## 絵画の臨界

近代東アジア美術史の枠組と命運

大雪の朝、髪の手を凍らせた郵便配達の女性が一袋の書籍小包を抱いて戸口を叩いた。熱い番茶がねぎら

ったあと、包みを開いてみて思わず息をのんだ。800頁にも及ぶかという超大作が収められていたから

である。しかも「海賊史観」という恐ろしい帯びまで巻かれている。熊野純彦のこれも評判の大作である『資本論の思考』(せ

りか書房)をどうやら読み終えたばかりだったからなおさらのことであった。

しばらく索引や図版文献案内や注を見つめ「臨界」の縦横を眺めてから5部構成の大作の頁を関心の赴くままに読み始めた。

著者が壮大な規模で展開する「海賊史観」とは、既成の知の枠組みをつねにボレミクに問い直し、流動化させ、臨界にまでほみ出



A5判・770頁・9500円  
名古屋大学出版会  
978-4-8158-0749-8

# 思わず時を忘れて引き込まれる

とどまるところを知らない越境する透徹した視線

前田 耕 作

元的に形成する「文化史」の「破砕面」の「具体的な実相」を抉り出してゆく。「制度論、認識論、歴史記述、映像論といった分野をおけるフロンティアは辺境でもなければ境界でもなく、異なったものが混交する「移行地帯」であったよ

うである(南川高志「新・ローマ帝国衰亡史」)。司馬遷が『史記』に「一流の地」とはこの地帯を指しているのだから。とどまるところを知らな

い越境する透徹した視線が、近・現代の日本、一七五〇年から一九五〇年

をめぐるところを知らない越境する透徹した視線が、近・現代の結節する歴史を生きた天心の言動に深く斬り込むことによって、彼が終生抱